

# 炎をつなぐ——「セツガイ」復活から50年、未来へ

寒空に響く、破竹音。高く燃え上がるやぐらを囲み、人々は一年の無病息災を願う。

田代地区の伝統行事「セツガイ」。毎年、2月3日の節分に合わせ行われています。鹿児島県内では「鬼火焚き」とも呼ばれ、年始めに各地で行われます。節分に合わせて行っているところは数少ないそう。なぜ、田代地区が節分に合わせて鬼火焚きを行うのかは、分かっていません。

そもそも「セツガイ」の語源とは——。それは、セツガイが節分に行われることに関係しています。節分の翌日は立春。「節分」はもともと「季節の変わり目」を表す言葉です。「季節変わり」↓「節変わり」↓「セツガイ」↓「セツガイ」と変遷したと考えられています。

## セツガイの歴史

セツガイについて、『田代郷土史』には、次のように記されています。

「セツガイの行事。鶴園部落の節分の行事に百年ほど古くから行われている鬼火タキがある。大きなもうそう竹で高さ9メートルぐらいのやぐらをくみ、前もって集めた杉の葉等をつめて夕もやの青くたれた夕方、それに火をつけて燃やす。生竹がパンパンはじけて勇ましい。子どもたちは餅を焼いたり、豆をまいたりする。そして竹のはじける音や、豆まくことで鬼を部落から追い払うための行事だと言っている。鶴園部落のセツガイの行事は他の地区の正月のオンピタツ（鬼火焚き）の行事と、二月の節分の行事が重なっ

た行事になっている。どうしてこうなったかはわからない。」

この記述から、セツガイは明治初期にはすでに鶴園自治会で行われていたことが推察されます。しかし、時代の流れとともに、セツガイは一度途絶えてしまふのです。

## 復活を遂げ、今年で五十年

それでは、いつ復活を遂げたのか——。昭和56年3月の「広報たしろ」に、以下の記述を見つけました。

「鶴園部落では、昔からの伝統行事として、いったん途絶えていたセツガイを5年前から復活しています。（中略）また、この行事は池野、西大原でも行われました。」

つまり、昭和51年（今から50年前）に鶴園自治会で復活した

セツガイが、昭和50年代から60年代にかけて、田代各地へ広がっていったと考えられます。

## セツガイの「今」

現在、セツガイを行っているのは鶴園自治会のほかに、平石自治会、麓地区、大原地区、花瀬地区、上部地区の全6か所。人口減少や高齢化などにより、継続できなくなったところもあります。

セツガイを次の世代に引き継いでいくには、どうすればよいのか。復活から50年を迎えた今、私たちにできることは何か——。先人たちが守り、つないできた炎を、これからの世代へ。地域の宝であるセツガイのこれからを、皆さんとともに考えます。



支柱と中央の柱を固定する。



支柱をたてる。



やぐらの中心が完成。



穴に一番長い孟宗竹をさす。



やぐらの中心の場所を決め、穴をほる。



枝を落とす。



孟宗竹を切る。



切ったのが竹を束にする。



のが竹を切る。



シノで番線を締めしていく。



孟宗竹を差し込み、やぐらの中心が完成するのですが、10メートル近くある孟宗竹を持ち上げ、穴にさす作業は、想像以上に大仕事。みんなで息を合わせて、一気に立てていきます。

次に、中心の回りに4つの穴を掘り、支柱を立てていきます。そして、支柱と中央の柱の間に竹を通し、番線で固定していきます。この番線をシノで締める作業が、

**やぐらを組む熟練の技**

やぐらの中心の場所を決め、穴を掘ります。この穴に、一番長い孟宗竹を差し込み、やぐらの中心が完成するのですが、10メートル近くある孟宗竹を持ち上げ、穴にさす作業は、想像以上に大仕事。みんなで息を合わせて、一気に立てていきます。

次に、中心の回りに4つの穴を掘り、支柱を立てていきます。そして、支柱と中央の柱の間に竹を通し、番線で固定していきます。この番線をシノで締める作業が、

**花瀬地区 セツガイの「今」**

やぐらは、二種類の竹を組み合わせて作られています。やぐらの骨組みとなるのは、太く長い『孟宗竹』。細く軽い『のが竹』は、骨組みを囲み、大きな炎を創り出します。

やぐら立ては、竹を切るところからスタート。孟宗竹は、できるだけ真っ直ぐなものを選びます。特に真っ直ぐ長く伸びているものを、やぐらの中心とします。その他のものは枝を落とし、適度な長さで切り揃えます。このとき、巻き尺や定規は使いません。長年の経験で培われた勘を頼りに、手際よく切り揃えていきます。

続いて、のが竹。竹の根元を刈払機で切り、20〜30本ずつの束を作っていきます。紐が緩まないよう、きつく結びます。

ここまでは、下準備。花瀬地区では、各自事前に準備したのが竹の束を持ち寄り、やぐら立てが始まります。



やぐらの骨組みが完成。

**炎を囲む、地域の温もり**

日が暮れ、火入れの時――。花瀬地区では、毎年、厄年の人が火入れを行っています。松明の火をやぐらに近づけると、瞬間に大きくなる炎。パンパンと大きな音が、辺り一面に響き渡ります。火入れが終わると、火を囲んで焼酎を飲んだり、カレーを食べたり、和やかな時間が流れます。

そして、子どもたちが一番楽しみにしている「お金まき」がスタート。セツガイでは、厄払いの意味を込め、お金や豆、お菓子などがまかれます。

一年の無病息災を願い、夜空へと立ちのぼる炎を見上げながら、人々の笑顔と歓声が寒空にあたたかく広がっていました。

まさに熟練の技。次々と固定され、丈夫な骨組みが出来上がりました。骨組みが完成したら、のが竹の束を周りに立てかけていきます。隙間なく、四方からバランスよく立てかけることが重要。年長者と若者が互いに声を掛け合い、作業が進みます。

あつという間に骨組みが見えなくなり、いよいよ最後の仕上げへ。やぐらの周りに縄をかけ、締めていきます。この縄の掛け方にも要領があり、ここを間違えるとやぐらの形が悪くなってしまう、との



のが竹の束を立てかけていく。



どんどん立てかける。



さらに立てかけていく。



骨組みが見えなくなった。



やぐらの周りに縄をかけ、締める。



やぐらが完成。

# 各地のセツガイを巡る

# 記録を辿る



上部地区公民館



花瀬地区公民館



平石自治会

2月3日の節分当日に行っているのは、麓地区と鶴園自治会のみ。その他の地域は、節分前の週末に合わせて行われています。火入れの時刻も地域によって様々です。今年は天候に恵まれ、どの地域も予定通り行うことができました。



大原地区公民館



鶴園自治会



麓地区公民館

- 明治初期? ● 鶴園で行われていた  
何らかの理由で途絶える
- 昭和51年 ● 鶴園で復活
- 昭和56年 ● 鶴園・池野・西大原で行われる
- 昭和58年 ● 上部・上原でも始まる
- 昭和59年 ● 鶴園・西大原・花瀬・上原・上部・大根田で行われる
- 昭和60年 ● 平石でも始まる

※『田代町郷土史』『広報たしろ』に記述があったものだけを年表に記載しています。

『広報たしろ』昭和56年3月号より抜粋→

鶴園でセツガイが復活して、今年で50年。半世紀を迎えます。

鶴園自治会の久保幸雄さん(90歳)は「自治会の役員や先輩方から『セツガイをもう一回やりましょう』という声が上がった」と当時を振り返ります。「このやぐらの組み方も、先輩方から代々引き継がれてきたもの。鶴園のやぐらのやぐら」と、久保さんは語ります。

やぐらの組み方も、大きさも、それぞれの地域によって少しずつ違ってきます。それは、先輩方から受け継がれ、今の担い手たちへと手渡されてきた証。竹の選び方、組み上げる順序、縄の締め方など、その一つ一つに、その地域ならではの工夫と誇りが息づいています。

形は違っても、込められた思いは同じ。先人たちが守り抜いてきた伝統は、世代を超えて受け継がれ、今も地域の中心で力強く燃え続けているのです。



# 繋ぐ これからの世代に

自分が小さい頃はセツガイの他にも十五夜の綱引きや相撲大会などがあり、「綱をみんなで練った」とか、「相撲で誰に勝った」とか、地域での思い出がたくさんあります。でも、今は花瀬地区も子どもが少なくなり、行事はこのセツガイだけ。セツガイがなくなれば、何もなくなってしまいます。

若い世代が減っていますが、先輩方と一緒にやぐらを立てて、晩は火のそばで焼酎を飲む。最高のひと時です。

セツガイだけは自分たち若い世代がしっかりと引き継いで、これからも続けていかないといけないと思います。



猪鹿倉自治会 川路 譲二さん

毎年、鶴園のセツガイに参加しています。セツガイの日は、僕のおばあちゃんが砂糖の入った餅を作り、みんなに振る舞っています。僕は、その餅が大好きです。これまではお父さんと一緒に松明を持って火入れをしましたが、今年は一人でした。やぐらに松明を近づけると、パチパチと音を立てながらあつという間に大きな炎になって驚きました。セツガイの日の一番の楽しみは、お金と豆を拾うことです。今年もたくさん拾うことができました。子どもは危ないから、やぐら立てに参加したことはありませんが、大人になったらやってみたいです。



鶴園自治会 鶴園 仁玖さん

令和7年4月に錦江町に引っ越してきた私たちにとっては、今回が初めてのセツガイでした。やぐらが立っているのを見て、「どんな行事なのだろう」と親子でわくわくしていました。転勤族なので、県内あちこち行きますが、こんな行事は人生で初めて。田代は空気が澄み切っているので、炎がとてもきれいに見えました。火を眺めながら皆さんと焼酎を飲み、地域の一員になれたような気がして、心が温かくなりました。子どもたちもお金やお菓子を拾ったり、帰りに買い物をして、素敵な経験をさせていただきました。

橋ノ口自治会 西之園 智博さん親子



今年は、火入れの役目を担いました。麓地区は、毎年、中学二年生が火入れを行います。僕を含めて6名が参加しました。初めての火入れは、想像以上に迫力があり、驚きました。火を近づけると、瞬間にパチパチと音を立て、燃え広がっていききました。田代中では、二年生が立志式を行います。この火入れも、立志式のように、大人になるための大切な経験のひとつなのかもしれません。どうしてセツガイは一度途絶えてしまったのか、どのようにして復活を遂げたのか、田代の歴史を深く調べてみたいとなりました。

馬場自治会 今村 寛司さん

